

## 俊徳丸伝説をめぐる 其二

第21回 酒都で聴く居囃子の会

番囃子「弱法師」

狂言 「月見座頭」

2026年10月11日(日)



古くから芸能と縁の深い酒都・西宮の造り酒屋において、地元在住の能楽師による謡と囃子で、能特有の音楽性と言葉の美しさを楽しむ「居囃子の会」。二十一回目となる今回は、三回シリーズの企画「俊徳丸伝説を巡る」の第二弾として、能「弱法師」と、現行狂言中屈指の名作と言われている「月見座頭」を上演しました。



### 大蔵流狂言 「月見座頭」

シテ（座頭） 善竹隆司

アド（上京の者） 善竹隆平

第一部では、狂言屈指の名曲、「月見座頭」を上演しました。本曲に登場する座頭は、月見ならぬ虫の音を聴きに野辺に出かけて中秋の名月を楽しむという、「弱法師」の俊徳丸と同じく、心から情趣を解する人物として描かれています。野辺のあちこちを巡りながら草叢にすだく様々な秋の虫の音色を慈しむ様子は、眼の前に穏やかな秋の情景が広がるような、印象的な場面でした。最後の意外な結末に深く考えさせられる曲ですが、座頭の後ろ姿を見送りながら、この曲が投げ掛ける問いにそれぞれ思いをいたすこととなりました。

尚、シテの座頭を演じる善竹隆司氏は、今回披き（初演）でこの大曲に挑みました。

## 番噺子「弱法師」

シテ（弱法師）

寺澤幸祐

ワキ（高安通俊）

梅若基徳

地謡

上田拓司

上田顕崇

梅若雄一郎

寺澤拓海

笛

貞光智宣

小鼓

久田舜一郎

大鼓

大村滋二



後半の第二部は、いよいよ番噺子「弱法師」です。

能「弱法師」の曲中、俊徳丸伝説の舞台となった四天王寺の縁起が語られる部分があり、聴きどころの一つとなっています。本尊の救世観音が「仏法最初のご本尊」と謡われますが、593年、飛鳥時代に聖徳太子により創建された四天王寺は、日本最古の官立仏教寺院として、「仏法最初」の地と称されていることがその所以です。当時の四天王寺は、病魔に冒された者、身体に障害を負った人々が救いや施しを求めて身を寄せる最後の拠り所となっており、俊徳丸と同じ境遇の人々が大勢いたのだと思います。

曲中の重要なシーンとして「日想観」の場面が登場します。これは真西に陽が落ちる彼岸の中日に夕陽を眺めて西方極楽浄土を観想するという信仰です。当時、四天王寺の西には間近に海が迫っていて、四天王寺の西門が極楽の東門と接していると信じられていました。彼岸の日没時にはこの西門の大鳥居の真ん中を通して夕陽が海に沈むので「日想観」を体感できるとして、多くの参詣客で賑わいました。弱法師も拝んだとされる四天王寺の石の鳥居は、今も現存しています。

さて能「弱法師」に登場する俊徳丸は、盲目の乞食という最下層の身分にありながらも、清く優雅な心を失わない若者として描かれています。梅の香りを楽しみその花びらと戯れる風流や、美しいものを愛で、日想観を拝み心の眼に見えた美しい風景に感じ入る俊徳丸の様子が印象的です。

今回小書きに「盲目之舞」とありますが、日想観の場面で、心に焼きついた難波の景色に興じ、盲目ながらも杖をつきつつ舞う、芸能者としての弱法師の片鱗を見せる様が噺子で表現されます。しかしその後一転して盲目の厳しい現実に戻されることになり、この間の俊徳丸の心の動きを、緩急のある地謡と噺子で盛り上げます。明るく優しい風情と拮抗する、心に深い悲しみを抱いた、能ならではの「俊徳丸」像が描かれました。



## 紅葉賀の小宴

公演後は、出演者を囲んで、お酒を愉しみながら懇談する「紅葉賀の小宴」が中庭で開かれました。若手能楽師の皆様の謡と小鼓による、秋の名曲「小督」、お酒にちなんだ「養老」も披露され、和やかなひと時を過ごしました。

謡 上田顕崇

梅若雄一郎

寺澤拓海

小鼓 久田杏海